

子どもの腹痛とその対応

三重大学医学部 第二外科・小児外科
内田恵一

Approach to Children with Abdominal Pain

Keiichi Uchida

Department of Surgery II, Pediatric Surgery, Mie University School of Medicine

腹痛は、子どもが病院を受診する際に多い主訴の一つですが、原因となる疾患により好発年齢が異なり、自然経過をみれば消失するものから、経過観察のために入院が必要な病態、外科的治療を含む緊急処置をしなければ生命に危険が及ぶ疾患まで、非常に多彩です。子どもの腹痛をきたす疾患の特徴として、訴えの多様性、病院受診時の注意点、主要疾患などについてお話したいと思います。

1) 訴えの多様性

子どもは、年齢より腹痛の訴え方が異なります。乳幼児が、なんとなく元気がないとき、食欲不振や拒食が見られるとき、泣き続けているとき、下腿を曲げた姿勢をずっととっているとき、腹部膨満がみられるとき、呼吸の回数が多いとき、これらは、腹痛の存在を疑う症状となりえます。幼児になりますと、ぼんぼん痛いと言えるようになりますが、まだまだ、痛みの部位や性状を明確には表現することはできません。したがって、随伴症状や客観的な所見から痛みの原因に迫る必要があります。また、気管支肺疾患、心疾患、陰部疾患など、腹部疾患以外でも腹痛を訴えることがあり注意を要します。

2) 病院受診時の注意点

診察に先立って、多彩な疾患群の鑑別に有用な、現病歴、既往歴、家族歴を聴取します。年齢、腹痛の特徴（発症の仕方、経過、性状、強さ、部位、食事との関係）、随伴症状（発熱、嘔吐、吐血、下血、下痢、便秘、血尿、呼吸苦、月経に関する事、外傷）、手術歴や、アレルギーなどについてお尋ねします。この情報が非常に大切です。

診察では、痛い腹部を診る前に、まず、全身状態をチェックし、緊急度や重症度を判断します。その後、恐怖心を与えないように、視診、聴診、触診の順で行い、冷たい手や聴診器はなるべく温めて、痛くないであろう部位から行います。また、手を怖がる場合は聴診器を手の代わりにして圧痛の有無を確かめることもあります。最初の重要な判断は、外科的緊急治療が必要かどうかです。すぐに診断がつかないときは、経過観察し繰り返し診察します。さらに、全身状態不良な場合、外科的疾患が疑われる場合や、症状が強く持続する場合は入院してもらい注意深く診察し、診断がついた時点で速やかに治療が出来るように対応します。

病院を受診する際、保護者の方には、緊急時で大変でしょうが、子どもを安心させるような、言葉かけや接し方をお願いします。保護者の方の不安や恐怖心は、子どもさんには、何倍にもなって伝わります。医療従事者もそのことを心がけていますが、このことが、腹部所見を正確に取る前の重要なポイントと考えます。また、鎮痛・鎮静剤は、症状や所見をマスクしてしまう可能性があるため、熱性けいれん発症時などを除いては、安易に使用すべきではありません。

3) 主要疾患の特徴

急性胃腸炎、急性虫垂炎、便秘、腸重積、消化性潰瘍、炎症性腸疾患、鼠径ヘルニア嵌頓と急性陰嚢症など、腹痛を主訴としうる疾患について概説します。